

大学法人化が犯すであろう「過ち」を占う

林 良博

東京大学農学部長

あと一年と少しに迫った大学の法人化は、どのような害悪を大学にもたらすのであろうか。それを占ってみたい。「占う」などと公言するのは不謹慎であると叱られるかもしれないが、まあ、そんなに肩肘を張らずに読んでいただきたい。わたしにとっていま一番問題と思われるのは、「あまりにもクソ真面目に考える」風潮なのだ。

「評価」がその代表例である。評価は、わたしたちが何気なく日常的に行なっている作業である。弁当持参でない人は、昼になって何を食べるか。そんなに選択肢はないかもしれないが、過去の経験とその日の気分によって店を選ぶ。店に入ってから、一応メニューを見て、何らかの評価の後に注文する。注文が正解であったかどうかを、わたしたちは無意識のうちに二段階評価する。すなわち運ばれてきたときと、食べ始めてからである。

あれこれ迷うことが嫌(正確に言えば、評価し決断することが嫌い)な人は、弁当を持参するか、それとも行く店と注文する品を前もって決めているかもしれない。

しかし、そんな人は大学の法人化に馴染まない。大学の自律性・自主性を高めるための法人化は、他人が用意したメニュー通りの食事をとることを許さないのだ。高級レストランで食事をするときのように、焼き方をどうするか、いつ持ってこさせる

か、コーヒーにするか紅茶にするか、つねに自己決定を迫られる。「いいかげんにせい！」と、つい叫びたくなるかもしれないが、それが大学の法人化であり、法人化が求める「評価」である。

東大の佐々木毅総長との対談で、オックスフォード大のコーリン・ルーカス総長が述べたように、大学評価の大先輩であるイギリスで行なわれた教育評価は、“作業がとてつもなく煩雑で、命令的で、詮索的なものになりがち”であったという。“コストは莫大で、組織の士気に対して破壊的な影響を与えた”この評価によって得られたものは、とてつもなく“費やした費用、失った士気、浪費した時間に見合うものではない”と断言する。同氏は、しかし、「私は教育評価をすべきではないと言っているわけではありません。このような教育評価をしてはいけないといたいのです」と述べている。その通りだろう。

さて、大学の法人化にあわせて本格評価を始めようとしている日本はどうなるか。わたしは極めて悲観的で、おそらく同じ過ちを日本は繰り返すと思う。そこで問題は、いかに過ちを最小限に食い止めるかだ。教育のように、いまだにその本質についての合意が形成されていない分野の評価は、慎重が上にも慎重を期すことしかないのではないかとわたしは思う。